

吉津宜英前所長への挽歌

永井政之

昨年末に遷化された隣寺住職の茶毘を終えて帰山した平成二六年一月五日夕刻、奥野光賢先生の奥様から電話があつたという家人の伝言で、折り返しの電話を奥野先生宅にいでて、吉津先生の訃報に接した。

細かな事はしばらく措くものとして、ともかく最近の吉津先生の四大不調は、周囲にいる者なら周知のことで、入院を繰り返し返す中での不慮の死であつた。個人的にはいまだにその死を納得できないでいるが、ともあれ大練忌もすぎ、彼岸を迎えようとする今、先生が長く所長を務められた仏教経済研究所の紀要を「追悼号」とするにあたり、秘書役に徹底され陰に回つて所長を支えられた工藤豊氏をたよりにし、所の運営については何もしなかつた前副所長として、せめて追悼の一文を書かなくてはお詫びにもならないと意を決し筆を執っている。

追悼と言っても「追憶」の範囲を出ない。「吉津宜英論」を書くには経過した時間が短すぎるし、書くべき方はほかに許多あろう。何より当人の言葉を借りれば「流通分の人生」に入られたことになるのだが、「荒ぶる魂」を沈静化させる努力が、遺された者・筆者においてより必要なこと言うまでもないからである。「挽歌」とする由縁である。

ところで吉津先生には専門論文を集成した『華嚴禪の思想史的研究』や『華嚴一乘思想の研究』といった成果のほかに、一般向けの著述がある。御恵贈賜り、私の手元にあるものを列挙すると次のようになる。

『縁』の社会学』（東京美術選書五四、一九八七年）

『やさしさ』の仏教』（春秋社、一九九八年）

『修証義による仏教入門』（大蔵出版、一九九九年）

『般若心経——中道と祈り——』（曹洞宗宗務庁、二〇〇四年）

『構築された仏教思想——法蔵——』（佼成出版社、二〇一〇年）

一般向けと言っても単なる人生論を記したものではない。本人は「分かりやすく」と心がけたはずだが、相当に手強い内容となっている。これらに共通するのは、難解な教法的背景を出来るだけかみ砕こうとされていることと、「人間」吉津先生自身の人生の「ある部分の葛藤」を隠そうとしない姿勢である。

かくして「寺と酒」をめぐってみれば、吉津先生の心情の吐露はかなり率直なものとなる。とはいえ、ご自身が『やさしさ』の仏教』で、「自伝」を書く意味にも言及され、「よく自分で伝記を書く人がいる。自分自身で自分の伝記を書いているのだから、その事歴は信用できると考えたいが、それが額面通りには受けとれない場合が多い」（同書、四二頁）と言っているように、扱う際には、書かれていない部分を斟酌するとともに、シヤイとも言える吉津先生独特のキャラを踏まえる必要があるろう。

ともかく私たちとの日頃の会話の一端がこれらに記されていることは疑いない。

吉津先生の全人格に言及できないのは当然にしても、先生が仏教経済研究所に寄せた想いの幾分かでも理解する一助として、これらの著述を通していささかの「追憶」を記すこととしよう。

昭和四〇年（一九六五）、東京オリンピックの翌年が筆者の駒大入学の年であった。己の英語の実力を顧みることなくIBIの部屋を尋ねて入会、そこで出会ったのが吉津先生であり、石井修道先生であった。新入生にとって何人かの四年生は文字通り「雲の上」の存在で、上級生の間で交わされる会話のほとんどを理解できず——秋山達子女史のユング研究所行などはその典型——、とりつく島すらなかったことを記憶している。

もちろんそれは新入生の側の問題で、上級生は、田舎出の連中を何とか早く一人前の大学生にし、加えて勉強の面白さを知らしめたいと思っておられたことは疑いない。吉津先輩は自身が卒論に選んだ『中論』の面白さを語り、石井先輩は南陽慧忠なる人物について語ってくれたことを記憶している。もちろんいずれも新入生にとってはちんぷんかんぷんの世界であった。

二年生以後、私は英語の世界ではなく、「仏教会」なる学部組織の端役をになうこととなり、結局、IBI固有の学的世界とは疎遠な学生生活を送ることとなった。折しも学園紛争まっただ中で、特に卒論を書くべき四年生の前期は、駒澤大学自体がバリケード封鎖とその撤去、ロックアウトや組織改革と、さまざま分野での後始末で騒然たる雰囲気の中にあつた。世の中の眼は日大、東大、浅間山荘、日本赤軍へと注がれ、それはそれで私の青春に大きな意味を持ったにせよ、いわゆる「勉強の世界」とはほとんど無縁であつたことを思い出す。

そのころの吉津先生の動向を、私はほとんど知らない。

再会は私が大学院に進学してからで、研究会の後には当然ながら、参加者の大半が真中のおでん屋、三軒茶屋の居酒屋へ繰り出した。後日談ながら吉津先生自ら「あの頃から今迄を計算するならマンション位買えたかも知れない」と宣つたことは、自ら「酒好き」であることを認めたことになろう。アルコールに強い体質であつたことは疑いな

い一方、「ノミの心臓」と自嘲さえされる、自他ともに認める繊細な部分克服努力の結果だったのかも知れない。

それにしても単なる酒好き・呑兵衛でなかったことは周知のこと。馬祖の「虎視牛歩」ではないが、敬愛されていた某先生そっくりの歩き方・後ろ姿と、ギョロツとして睨むまなざしを注ぎつつの議論は、後輩にとっては相当にきついものがあった。

もっとも本人が「私が議論をふっかけたのは、見所があると思った後輩だけだ」と述懐していたことは、やり込められた側としては、名誉なことと銘記しておく必要があるかも知れない。

筆者が記憶している議論。

一つは「柳田聖山先生の方法論」をめぐってであり、いま一つは「自灯明・法灯明をどう思うか」をめぐってであった。柳田先生が中国禅宗史研究に大きな足跡を残されたことは言うまでもなく、学部時代に『初期禅宗史の研究』に啓発された筆者もその影響下にあった。とは言え、修士課程の一年生位で「方法論」が論じられるはずもなく、「灯史の研究ではあっても、あれは思想史研究だ」と喝破された意味を腹落ちしたのは、ずいぶん経ってからのことであつた。

いま一つの「自灯明、法灯明」についても、議論の発端はご自身がその問題を抱えて苦吟していた時代と重なる。その答えを筆者が出せたのは「学位請求論文」を執筆している過程であつたから、多分、その当時としてはただ聞くだけの為体だったように思う。そしてあえて書くなら、私が学位請求論文を書いている際、「序論を書くのが大変だろう」と、吉津先生から言われたことには「誠に」としか応えようがなかった。本論の部分についてはそれまでの論文を寄せ集めて何とかしたが、問題は「何の目的で」という方法論の部分で、そのために半年以上の時間を費やすこととなった。その真つ最中の声かけは、まさしく「氣遣いの吉津」の面目躍如であり、「この人、よく見

ているな」と感嘆の想いを抱くとともに、本当に勇気づけられた。

本紀要には吉津先生の業績の一覧が付されるが、それらの業績の行間には、吉津先生の人生が隠されていると言ってよいであろうし、今更ながら私が突きつけられた二つの質問は、後に触れるように吉津先生にとっても大きなテーマだったことが分かるのである。

吉津先生との議論ののち、私は「自灯明、法灯明」が、荒木見悟先生の主張される中国人固有の二元論と結んで、「中国仏教」の世界となり、特に「自灯明一乗」は中国禪宗の根幹となると考えるにいたった。自灯明とはいっても、それは生身の人間世界を離れたものではないから、結局、他者との関係をどう結ぶかということも極めて重要な問題となる。このような流れの中で「仏経」に入所しないかという声かけを頂き、「分かりました」と即答したのは、それなりの縁があったからと思っている。

ともあれ吉津先生は石井先生とともに博士課程から助手へとすすまれ、結婚もされ、傍目には順風満帆の学者生活を歩まれているように思われた。共同研究『阿毘達磨俱舍論索引』で学士院賞を受賞されたのは一九八〇年のことであった。しかしご自身は、そう思っておられなかったらしい。

アメリカでの在外研究を終えた翌年、一九八七年刊行の『縁の社会学』は、インドの仏教誕生から中国での伝播、展開などが、「縁」をキーワードとして述べられるが、その第三章「縁の教えは、今実現できるか」には、寺に生を享けたことから、出家、修学にはじまり、アメリカの社会や宗教などをふくめて、「自伝」が述べられる。得度の様子やお師匠さんのことは割愛する。

小僧になってからは、おやじ、いや方丈様にあたたまをたたかれて御経を暗記し、檀家回りをやり、葬儀には必

ず行く、ごく普通の僧侶の成長過程である。大学受験で少し悩んだ。「どんな職業についてもよいから、必ず最後は寺を継いでくれ」という公案のようにむずかしいおやじの言葉を尊重して、京都大学の法学部に入って弁護士にでもなろうかと思ったが、見事に失敗して、めでたく駒澤大学仏教学部禅学科に入学した。……今の私は自分が禅学科に入って禅の教えをいろいろ聞いた上で、仏教学に転じてよかったと思っている。私の仏教学はたえず宗学を意識することになった。それにしても私の仏教学はまことに浮気の仏教学である。『中論』や『大智度論』を研究した因縁から平井俊榮先生の御指導の下で三論学をやっているながら地論学に浮気を起こし、鎌田茂雄先生の御指導の下で華嚴学を研究しながら、今や法相唯識学にチラチラと視線が移るこのごろである。

(同書、一一二頁)

布教や寺檀制にも言及されていて、後の吉津先生の問題意識を考える上での根幹となるものがここにある。と同時に、意外に淡々と自らの半生を記述していることに気づく。ただしこの淡々ぶりはその後次第に変化している。

前後して刊行された『修証義による仏教入門』は、曹洞宗の説誦經典に位置づけられる『修証義』を、いろいろな問題を持っているにせよ、むしろ現代社会において通用するものとして積極的に再評価しようとして著わされたもので、吉津先生の「反骨」振りと、前掲書で述べているように「ラゴ」として生を享け、さらに仏教学を学び講じる立場に立ったことの「しんどさ」を垣間見せている。『修証義による仏教入門』の中で「人身うること難く、云々にこと寄せて次のように独白している。

私自身について語れば、五十代になって寺に生まれたことに感謝する気持ちが少し出てきた。遅いといえば本当に遅いが、正直な感慨である。三十二歳の春、お彼岸の檀家まわりをしていて、行き詰まりを感じて突然上京し、四十二歳の時、父が亡くなるまで広島島の寺に帰らないでいた。父は五十歳の時、私が大学三年生の秋に交通事故を起こし、闘病生活を続けていたので、早くから私に住職を譲っていた。私はそれを重荷に感じたのである。

四十代には、寺の問題に加えて、仏教観で悩んだ。「正しい仏教」とは何かという問題である。教壇に立つことにもプレッシャーを感じて、教員を辞めたいと考えた。平成の天皇即位の大嘗祭が行われた平成二年の秋の苦しさを今でも思い出す。テレビで大嘗祭の式典を見ながら、自分の人生を恨んでいた。大学院の研究会から講演を頼まれたのに、それをキャンセルしてしまい、悩みを一層深めた。平井俊榮先生の還暦の祝賀会にも出席できない始末であった。不謹慎ではあるが、朝から酒を飲み、夜は眠れない愚痴をいい、家内を悩ましていた。

四十代の後半も、この体たらくであった。この状況を脱出できたのは、やはり家人を始め、周囲の友人たちのお陰である。まず大学院の講演会のやり直しを許してもらい、「自灯明一乗」という題で発表した。その当時の駒澤大学内の「批判仏教」の主唱者への私なりの意見を述べた。この発表でだいぶ気持ちが楽になった。また、そのころから駒澤大学日曜講座の講師を勤め、華嚴経「入法界品」の善財童子の求法の物語を講義していた。その年の十二月には番外編で「上馬の酒人」という題で話をした。私はその当時東京都世田谷区上馬に住んでいた。その住人が酒の生活に明け暮れて、行き詰まり、尋ねてきた善財童子に逆にやりこめられる物語に仕立てて話した。それを聞いた日曜参禅会の皆さんもびっくりしたようである。私は懺悔のつもりであったが、これは甘えの極地であった。自分を吐き出す試みが自分を楽にしたことは事実である。今から思えば汗が出るほどに恥ずかしいが、感謝の気持ちでいっぱいである。

私の四十七歳の秋は激動の三ヶ月であった。この時が私の人生の折り返し地点であると思っっている。その時から、あまり焦らなくなった。走る必要はないから、歩いたり、立ち止まったりしながら、声援に応えたり、何かリクエストを求められれば、手助けしながら、人生マラソンを、いつどこがゴールか分からないし、ゆっくり進んでゆけばよいと思うようになった。好い加減に気が楽になった。

そのころから私は寺に対しても逃げる姿勢ではなくて、向かう態度が出てきた。いとこが住職を務めてくれ、私が寺に帰っていても、場違いな感じは否定できない。かなり居直った感じを与えているとは思いますが、私なりに何かできることもあるかと思つて、時々帰ることにしている。

五十歳の時にあまりにも痛風が出るので、酒をストップした。三十年間大変な大酒のみで有名だったので、この断酒は評判になった。禁酒して最初一年間は苦しかったが、五年以上経過した今では非常に楽になった。長時間の宴会は苦痛であるが、短い宴会ならば酒のことを考えなくてよいので気楽である。この酒を止めた平成六年あたりから、仏教の勉強が楽しくなった。人のことを気にするよりも、自分のことを考えることが大切なのだと思ふようになった。最近になってやつとこの修証義の一節にあるように「素晴らしい人生を粗末にし、はかない露の命を無常の風に打ち任せたままにはならない」と思ふようになったところである。（前掲書、六〇頁）

平成六年一月五日から酒を止めたいきさつは『やさしさ』の仏教』にも詳しい。

生前『大乘起信論』をめぐる成果を、某出版社に入稿されていたという噂があるが、当面、最後の著書となったのは『構築された仏教思想——法蔵——』である。

この本の刊行の前後から、先生はしきりに「定年まであと三年」を連発するようになり、研究室に何うと「定年

まであと何日」と言いつつ、日記とも言うべき大学ノートを振りかざすようになった。結局その大学ノートは「吉津宜英のエンディングノート」となってしまった。内容は知るべくもない。

そのような意味で、この『法蔵』の行間にあふれる心情は重要である。

言うまでもなく筆者は華嚴学、あるいは法蔵教学についてはまったくの門外漢で、先生が紡ぎ出された華嚴世界がまっとうなのか、そうでないのかも分からない。ただこの本の内容が、たとえば先に挙げた『縁』の『社会学』や『修証義』をめぐる論考、およびその結論と相即するのかもしれないのか。私は『修証義』で出した結論と齟齬しているように思えてならない。『法蔵』で言う。

法界縁起についてこれから語る。それは「一即一切・一切即一」の縁起であるが、釈尊の縁起観から、智儼や法蔵のような法界縁起観がいかに展開したのであるうか。

釈尊の縁起は、弟子のアツサジ（阿説示）がまだ六師外道の一人のサンジャヤの弟子であったサーリプッタ（舍利弗）に向かって、あらゆるものは原因によって生ずる。如来はそれらの原因を説かれた。またそれらの消滅をも。大沙門はこのように説かれたお方だ。（パーリ『律蔵』「小品」。「原始仏典第一卷——ブツダの生涯」所収、畝部俊英訳）と語ったものが原型に近いのであろう。……すべては縁から生じる。私たちの命が深い縁によるどんな不思議なものであるか、そして無常の風の前にいかに脆いものであるかを語るのが縁起の教えの原点であり、また無常の教えである。……しかし、この縁起の教えも、しだいにこの基本の精神がわすれられていったのではなからうか。……大乘仏教は『般若経』に見られるように、また龍樹の『中論』が説くように、空の教えのもので、この無常性を取り戻そうとした。しかし大乘仏教も部派仏教以上に輪廻の思想を色濃く取り入れてしまった。唯

識教学等はその典型であろう。……空の原意は無常であったはずであるが、仏も教えも常住を志向したのが大乘仏教の趨勢であった。この傾向はインドから中国に仏教が伝来し、大乘仏教が主流になるにつれ、中国思想の体用論（実体としての「体」と、現象としての「用」の相関性を説く考え方）等が論理的に援護して、ますます強くなったのではなからうか。「いまだ生を知らず、いづくんぞ死を知らんや」（『論語』先進第十一）と述べた孔子が謙虚に見えるほどに、中国の仏教者は生死の超脱と、生命の永遠性を語りすぎたのではないか。無常はどこかに行ってしまった。縁起が担っていた生命の不思議さと脆さはどこにいったのか。中国では、しだいに禪宗のような力強い仏教が人気を得ていくことになる。（同書、七五頁）

言わんとするところは、釈尊の説かれた「縁起」と、法蔵の「一即一切、一切即一」とはほど遠い関係にあるということである。法蔵批判は、すでに「自灯明一乗について」（駒大学院仏教学研究会年報二四、一九九一年）において、強く主張されていて、突然思いついたものではないことは明らかである。それは結局は先生が問題意識として最後まで持ち続けられた課題となるが、その間に曲折のあることは否定できない。次の一段は先の論文で「自灯明一乗」を希求した先生にしては気弱でニヒルささえ感じさせる発言と、いまさらながら思うのである。

釈尊の縁起は本当にか細いともいえる弱い人間観である。それは、私たちの命が無常の風の前で、まさに風前の灯のような命であることを教える。……私たちは釈尊の孤絶な、弱い人間観をどこまでも慕い続けなくてはならないと思う。（同書、七六頁）

右の文を読むとき、定年を迎えるにあたって、駒澤大学での四〇年以上の歳月を、いやが上でも「無常」として意識された吉津先生の、結果としては最晩年となった毎日を察せさせる。

平成二一年四月から四年間、土・日の出勤が当たり前の学部長を務めさせて頂いたとき、その土・日にお会いできたのが吉津先生で、平日とは異なった会話が弾んだことが昨日のようである。

そんな私と吉津先生にさらに奥野先生が加わっての昼食の時間、「定年したらお寺に入ったら」「何人かで共同して輪番の寺を建立したら」というのが、恒例の会話になった時期があった。

半ば冗談、半ば本気の会話が成立したのは、ラゴに生まれたものさまさまな縁の中で、ついに寺から「出家」した先生の中に、結局、「お寺」があると、私を感じたからである。お寺と檀家の関係は、とりもなおさず社会との関係、そして教員と学生の関係に置き換えられる。それは後述するように仏教経済研究所に深く関わり続けられたこととも関係する。

今となつては確認決着しようもないが、「松林十三世」は、先生の中で重かつたはずである。

ところで吉津先生は、助手に着任して二年後、桜井秀雄先生に請われて幹事として本研究所の運営に関わり、原田弘道所長の下で副所長を、原田所長亡き後の平成一三年から所長の任にあつた。本研究所の構成員は本学教員はもとより、他大学の教員や会社役員経験者など、その多彩なることは本学の他研究所を圧倒していると自負している。さらに長期休暇中を除けば毎週研究会が行われていることも他に例をみない、所員は年間一回以上の発表を義務とし、二時間ほどの時間を発表と質疑にあてている。発表の内容は自由だから、聴く側がまったくの門外漢となることもある。それでも議論が止まらないのは、発表者以外が、当該分野については素人で、その素人が素人なり

の間を発しても誰もバカにしないという雰囲気を持っていないからである。お茶を飲みあめ玉をしゃぶりながら、多彩な人材が作り出すアットホーム的な場が仏教経済研究所にはある。平成二五年、吉津先生に先んじて物故された寺下英明仏教タイムス社長も有力な関係者のお一人であった。

そのような形式の研究会となったのが何時の頃からなのかは知らないし、改革の意見も仄聞するが、少なくとも吉津所長はこの線を守ろうとされた。それはたぶん「蓮根型」の社会を提唱したこととリンクする。その意味で吉津所長は研究所運営において「理と事」の一致をはかろうとしたのである。

考えて見れば「仏教経済」とはどのような学問なのか。「仏教の経済」なのか、「仏教と経済」なのか、仏教においてウエバーの『プロ倫』的議論が可能なのかどうか。

筆者は、スタンスを広く取って、「仏教」とそれを取り巻く、「経済」に代表される社会と考えている。この場合、仏教が中心にあるとするなら、「年輪型」となるが、仏教も蓮根のアナの一つとみるなら「蓮根型」となる。

吉津所長は蓮根型の研究所運営を目指したと私は受け止めている。少なくとも「自己チュー」的な発想、「角度のある物言い」は嫌いであった。ともかく所長としての責任感と義務感、そして熱意とカリスマ性の故に、個人的なアナを結ぶ接着剤となつて、運営は一応成功してきたと見るべきであろう。問題は接着剤がその役割を降りたとき組織はどうなるのか。答えは長谷部所長、四津谷副所長を中心とした、これからの仏教経済研究所の中にあること、自明である。

平成二六年一月二四日、高祖降誕会の日に行われた仏教学部主催の「最終講義」で、石井修道先生は、吉津先生と会話する中で、吉津先生が「未来の教化学」を強調されたことを指摘して結びとされた。どのような「未来の教化」を指されたのか、今となっては想像の範囲を出ないが、たぶんそれは『縁』の社会学の次の一文にある。

アーナンダよ、比丘の集いはこの私に何を期待しているのか。……また、アーナンダよ、もしある人が『比丘の集いはこの私が指導していこう』とか、あるいはまた『比丘の集いは私の指示を仰いでいる』と考えたならば、比丘の集いに対して何か指示を与えることもあるかもしれない。しかし、アーナンダよ、如来は『比丘の集いはこの私が指導していこう』とか、『比丘の集いは私の指示を仰いでいる』と考えたことはまったくない。したがってアーナンダよ、如来に、比丘の集いに対して何か指示を与えようと言うことがありえようか。（『ブツダの生涯』二〇四頁・二〇五頁）

ここで釈尊は重要なことを言っている。

今の自分は一回たりともこの集いの指導者だと考えたことはないということは、釈尊自身が一人の比丘として他の比丘たちと全く同列に立っていることを示している。このことは現代の日本の仏教に至るまでの仏教の歴史を見る視点として大書しておかなくてはならない。特に日本の仏教はすべての教団で先ず宗祖を立て、そして教団のリーダーを中心として活動している。いわば宗派仏教となっている。このような日本仏教の現状と、釈尊の考えとは大きな隔たりがあると云わざるをえない。

これまで見てきたような縁の人間観、縁の集いに照らして考えてみれば、釈尊と比丘たちの対等性は容易に帰結できるのである。（前掲書、四九頁）

『般若心経——中道と祈り——』——宗務庁からの刊行ということもあつてか、この本の前半は先生にしては硬い語り口調で面白くないが、——「第四 私たちの章——心経——」が、人権や教育、グローバル社会と公害、ティ

ク・ナット・ハン師の反戦の祈りについて触れているのが手がかりとなろう。

いったい近年、吉津ゼミに沢山の学生が集まることは、仏教学部では有名で、平成二五年度を例に取れば卒業論文の指導を受けた学生は四〇名を超えていた。さまざまなジャンルの論題が並び、嘩然とする教員も少なくない。なぜこのように多岐にわたる分野を指導されようとしたのか。

先の『法蔵』において、華嚴の十玄門の第七「諸蔵純雜具徳門」を解説する中で、自分が卒論の内容を学生の自由な選択に委せている理由を縷々述べられる。

私は卒業論文の論題は学生の自由な選択に任せている。他の先生から見れば、それが仏教学部の論文としてはふさわしくないとと思われることもあるだろう。携帯電話もあり、ゴキブリもあり、自転車もある世界である。ただ、学生には「論文にはしてほしい」と言う。きちんと通説、学説、自説を仕分けして引用し、その引用を著者になり代わってパラフレーズ（敷衍）して、その説に対する意見を表明する。……

なぜ学生の自由に任せるかという点、どんな題もそれを掘り下げていけば、人間とは何か、現代とは何か、いかに生きるか等の大事な問題に必ずぶち当たると思うからである。……純雑で言えば、自分に純粋に徹してほしいと思う。そうすれば、おのずと複雑な世界が現成してくる。最初から複雑な世界に飛び込んで混乱するだけである。私たちはみんな雑用が多いと言う。それでも私は「人生、雑事無し」をモットーとしている。目の前に出ていることをやるだけである。それが純粹であると思う。ただ、次々とさまざまなことが到来する。これは複雑である。しかし雑事ではない。さまざまなあや、模様である。いろいろあるから楽しい。（同書、一二四頁）

「教員として生きている以上、学生とどう向き合うかは常なる課題であるのは吉津先生に限らない。「四馬」への対応は絵空事ではない。一切合切を引き受けて面倒を見るのが負担であることは当然だし、そもそも学生が指導する側の想いを文字通り受け止めているという保証はない。むしろ肩すかしを食うことの方が多い。」

ここで私は『遺教経』の一節を思い出す。

我は良医の病を知つて薬を説くが如し。服すと服せざるとは医の咎に非ず。又た善く導くものの人を善道に導くが如し。之を聞いて行かざるは導くものの過に非ず。

吉津先生は、教員としての自らの責務を、蓮根型の生き方をもって、全うされようとした。むしろし過ぎたと言つて良いように思う。蓮根と年輪の間を行ったり来たりしながら、時には気遣いなく言いたいことを言えば良かったのと思う。お母さんの言うようにもつとユツクリやれば良かったのにも思う。酒に明け暮れていたころの追想で言っている。

そんなある日、母からの電話で、「いいかげんに、いきんしゃい」と広島弁で言われた。「好い加減に生きなさい」と言ってくれたのである。この言葉は、私の心に沁みるものがあつた。母から見ると、その当時の私は力んでいると感じたのであろう。「あまり力まず、無理せず、いいかげんに生きろ」というわけである。この言葉も「いいかげん」というと、無責任な、どうでもよい、とんでもない生き方を言い表すことにもなるが、「好い加減」

ということになると、なかなかのものである。

お風呂に入っていて「お加減はいかがですか」と聞かれて、「本当に好い加減です」と言えば、気持ちの良い、良い風呂加減であることを示す。
（『やさしさ』の仏教』二一九頁）

すでに老境を迎えつつある我が子を思いやった御母堂は、平成二三年一月、九〇歳で逝去された。その頃からノートの日記がはじまったように思うし、先生の酒量もいやまして増えたように思う。先生も多くの男性がそうであるようにマザコンだったのである。

『やさしさ』の仏教』では、優しさ、厳しさ、甘さの三つの柱と人間の生き方の関係性が九句分別として説かれる。その中で、『典座教訓』が引用する道元禪師と老典座の問答を取り上げて「自分にも優しい、他人にも優しい」生き方の事例とされる。人間の生き方は千差万別で分別しても仕切れるものではないが、ともかく仏教学を専攻された吉津先生らしい発想と思いつつ、さて「先生の生き方はどうだったのでしょうか」と、「優しくしていた側・正宗分を生きる側」から、大寂定中に勃跳され、流通分を生きることとなった先生にあえて発問したい。少なくとも「貴方の遺した業はいやでも不滅です、いろいろな形で」と言わずもがなの確認だけはしておきたい。

答えを聞くのはしばらく後にしたいが、ここでは仏教経済研究所で研究会を共にした仲間、また御指導を賜った私の二人の愚息とともに、先生の御冥福を祈りつつ擱筆する。

伏願 松林十三世彰山宜英大和尚 増崇真位

合掌

（二〇一四年三月一七日稿、未完）

吉津 宜英 略歴

生没

昭和一八（一九四三）年二月一七日生、平成二六（二〇一四）年一月五日没

学歴

昭和四六（一九七一）年三月二五日、駒澤大学大学院人文科学研究科仏教学専攻博士課程、満期退学

職歴（駒澤大学関係のものに限る）

昭和四六（一九七一）年四月 駒澤大学仏教学部助手

昭和四八（一九七三）年四月 駒澤大学仏教経済研究所幹事

昭和四九（一九七四）年四月 駒澤大学仏教学部専任講師

昭和五三（一九七八）年四月 駒澤大学仏教学部助教授

昭和五九（一九八四）年四月 駒澤大学仏教学部教授

平成三（一九九一）年四月 駒澤大学仏教経済研究所研鑽員

平成六（一九九四）年四月 駒澤大学仏教経済研究所副所長

平成八（一九九六）年九月 駒澤大学教職員組合委員長（平成九年一月まで）

平成一三（二〇〇一）年四月 駒澤大学仏教経済研究所所長

平成一五（二〇〇三）年四月 駒澤大学大学院人文科学第一研究科委員長（平成一七年三月まで）

平成一八（二〇〇六）年四月 駒澤大学学生部長（平成二〇年再任、平成二二年三月まで）

平成二四（二〇一二）年六月 駒沢宗教学研究会理事長、任期二年

学位・榮譽

昭和五五（一九八〇）年六月一日、日本学士院賞（共同研究『俱舍論索引』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、平川彰氏等と受賞）

昭和五五（一九八〇）年七月一八日、日本印度学仏教学会賞

平成四（一九九二）年一〇月二二日、博士（仏教学）取得

平成二五（二〇一三）年七月六日、仏教思想学会仏教思想学術賞

著作・論文等 目録

著書

- 『華嚴禪の思想的的研究』（大東出版社）、一九八五年
 『仏教の論とところ―縁―の社会学』（東京美術選書五四、（東京美術）、一九八七年）
 『華嚴一乗思想の研究』（大東出版社）、一九九一年
 『（やさしさ）の仏教』（春秋社）、一九九八年
 『修証義による仏教入門』（大蔵出版）、一九九九年
 『般若心経―中道と祈り―』（曹洞宗宗務庁）、二〇〇四年
 『構築された仏教思想、法蔵―「二即一切」という法界縁起―』（佼成出版社）、二〇一〇年

共著・共編

- 平川彰・平井俊榮・高橋壯・袴谷憲昭・吉津宜英『阿毘達磨俱舍論索引Ⅰ』（大蔵出版）、一九七三年
 平川彰・平井俊榮・高橋壯・袴谷憲昭・吉津宜英『阿毘達磨俱舍論索引Ⅱ』（大蔵出版）、一九七七年
 平川彰・平井俊榮・高橋壯・袴谷憲昭・吉津宜英『阿毘達磨俱舍論索引Ⅲ』（大蔵出版）、一九七八年
 大法輪閣編集部編『地蔵さん入門』（大法輪選書、大法輪閣）、一九八四年
 山内舜雄・吉津宜英共編『曹洞宗教義法話大系、第九卷「曹洞宗の根本聖典Ⅱ、般若心経・遺教経他」』（同朋舎出版）、一九九一年
 一色白泉揮毫・編著、安田映胤、宮崎健司、吉津宜英共著『写経のすすめ』（大法輪閣）、二〇一〇年
 大法輪閣編集部編『これだけは知っておきたい法華経の基礎知識、全28章を読み解く』『観世音菩薩普門品第二十五』（大法輪閣）、二〇一一年
 大法輪閣編集部編『これだけは知っておきたい般若心経の基礎知識』『般若心経を理解するためのQ&A』（大法輪閣）二〇一二年

論文

- 「中論観涅槃品研究」昭和四〇年度駒澤大学仏教学部卒業論文、主査・宮本正尊、副査・増永靈鳳、一九六五年

- 「大智度論研究」 昭和四二年度駒澤大学大学院人文科学研究科仏教学専攻修士論文、主査・宮本正尊、副査・小川弘貴、一九六八年
- 「慧影の大智度論疏をめぐる問題点」『印度学仏教学研究』第一六卷第一号、一九六七年
- 「大智度論研究における諸問題」『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第二号、一九六八年
- 「嘉祥大師研究序説―対破教学の研究（一）北土智度論師―」『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第三号、一九六九年
- 「北土智度論師について」『印度学仏教学研究』第一七卷第二号、一九六九年
- 「吉藏の唯識大乘義批判」『印度学仏教学研究』第一八卷第一号、一九六九年
- 「吉藏の教学と破邪の構造―唯識大乘義批判を中心にして―」『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第四号、一九七〇年
- 「中国仏教におけるアビダルマ研究の系譜」『印度学仏教学研究』第一九卷第一号、一九七〇年
- 「中国仏教におけるアビダルマ研究の発達」『宗教研究』第四四卷第三輯（通卷二〇六号）一九七一年
- 「中国仏教における大乘と小乗」『駒澤大学仏教学部論集』第一号、一九七一年
- 「道元禪師の経師論師批判」『宗学研究』第一三三号、一九七一年
- 「隋唐新仏教展開の基調（その一）―教と理との相関―」『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第五号、一九七一年
- 「大乘義章」「八識義」について『印度学仏教学研究』第二〇卷第一号、一九七一年
- 「経律論引用より見た『大乘義章』の性格」『駒澤大学仏教学部論集』第二号、一九七一年
- 「大乘義章の構成について」『宗教研究』第四五卷第三輯（通卷二一〇号）、一九七二年
- 「大乘義章八識義研究」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三〇号、一九七二年
- 「四卷楞伽経と十卷楞伽経」『宗学研究』第一四号、一九七二年
- 「浄影寺慧遠研究について」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第二四号、一九七二年
- 「浄影寺慧遠の『起信論疏』について―曇延疏との比較の視点から―」『印度学仏教学研究』第二二卷第一号、一九七二年
- 「慧遠の『起信論疏』をめぐる諸問題（上）」『駒澤大学仏教学部論集』第三号、一九七二年
- 「浄影寺慧遠の真妄論について」『宗教研究』第四六卷第三輯（通卷二一四号）、一九七三年
- 「無情仏性説の考察」『宗学研究』第一五号、一九七三年
- 「地論師という呼称について」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三一号、一九七三年
- 「浄影寺慧遠の「妄識」考」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三二号、一九七四年

- 「浄影寺慧遠の縁起説について」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第六号、一九七四年
 「浄影寺慧遠の涅槃義」『印度学仏教学研究』第二三卷第一号、一九七四年
 「慧遠の仏性縁起説」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三三号、一九七五年
 「四宗判と空義」『印度学仏教学研究』第二四卷第二号、一九七六年
 「慧遠『大乘起信論義疏』の研究」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三四号、一九七六年
 「地論学派の学風について」『宗教研究』第五〇卷第三輯（通卷二三〇号）、一九七六年
 「浄影寺慧遠の教判論」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三五号、一九七七年
 「法身有色説について」『佛教学』第三号、一九七七年
 「法蔵の一乘思想について」『宗教研究』第五一卷第三輯（通卷二三四号）、一九七七年
 「華嚴五教章の鍊本について」『印度学仏教学研究』第二六卷第一号、一九七七年
 「華嚴五教章の研究」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三六号、一九七八年
 「大乘義章の成立と浄影寺慧遠の思想（1）」『三蔵』一六五、一九七八年
 「大乘義章の成立と浄影寺慧遠の思想（2）」『三蔵』一六六、一九七八年
 「華嚴経伝記について」『駒澤大学仏教学部論集』第九号、一九七八年
 「華嚴経伝記について」『印度学仏教学研究』第二七卷第一号、一九七八年
 「法蔵伝の再検討」『宗教研究』第五二卷第三輯（通卷二三八号）、一九七九年
 「法蔵伝の研究」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三七号、一九七九年
 「法蔵の四宗判の形成と展開」『宗教研究』第五三卷第一輯（通卷二四〇号）、一九七九年
 「法蔵の著作の撰述年代について」『駒澤大学仏教学部論集』第一〇号、一九七九年
 「法界観門について」『印度学仏教学研究』第二八卷第一号、一九七九年
 「華嚴教学における宗について」『宗教研究』第五三卷第三輯（通卷二四二号）、一九八〇年
 「澄観の禪宗観について」『宗学研究』第三二号、一九八〇年
 「澄観の華嚴教学と杜順の法界観門」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三八号、一九八〇年
 「法蔵の『大乘起信論義記』の研究―それ以前の諸注釈書との比較を通して―」『駒澤大学仏教学部論集』第一一号、一九八〇年

- 「法蔵の大乗起信論義記について」『印度学仏教学研究』第二九卷第一号、一九八〇年
- 「華厳教学における生死観序説——十地品六現前地の注釈を中心として——」『日本仏教学会年報』第四六号、一九八一年
- 「頓教に対する澄観の解釈について」『宗学研究』第二三三号、一九八一年
- 「華厳教判論の展開——均如の主張する頓円一乘をめぐって——」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三九号、一九八一年
- 「神秀の華厳経疏について」『宗学研究』第二四号、一九八二年
- 「宗密の『大乗起信論疏』について」『印度学仏教学研究』第三〇卷第二号、一九八二年
- 「『縁起』の用例と法蔵の法界縁起説」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第四〇号、一九八二年
- 「性相融会について」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第四一号、一九八三年
- 「宗密の本来成仏論」『宗学研究』第二五号、一九八三年
- 「華厳と禪」『講座 大乗仏教3華厳思想』(春秋社) 所収、一九八三年
- 「華厳禪の形成」『理想』一一月号(通卷六〇六号)、一九八三年
- 「縁起と性起——訳経から教学形成への一視点——」『東洋学術研究』第二二卷二号(通卷六三三号)、一九八三年
- 「旧来成仏について——性起思想研究の一視点——」『印度学仏教学研究』第三三卷第一号、一九八三年
- 「華厳宗」(平川彰編『仏教研究入門』(大蔵出版)、一九八四年)
- 「法界縁起の成仏論」『駒澤大学仏教学部論集』第一五号、一九八四年
- 「澄観の華厳教学と禪宗」『東京大学東洋文化研究所紀要』第九七号、一九八五年
- 「法蔵の法界縁起説の形成と変容」『平川彰博士古稀記念論集、仏教思想の諸問題』(春秋社) 所収、一九八五年
- 「アメリカ仏教学管見」『駒澤大学仏教学部論集』第一七号、一九八六年
- 「新羅の華厳教学への一視点——元暁・法蔵融合形態をめぐって——」『韓国佛教学 SEMINAR』第二号、一九八六年
- 「中国仏教における一乗の系譜」『宗教研究』第六〇卷第四輯(通卷二七一号)、一九八七年
- 「華厳教学への最澄の対応について」『華厳学研究』創刊号、一九八七年
- 「宗旨」の学について『宗学研究』第二九号、一九八七年
- 「大乗起信論成立の重層性とその思想の包容性」(『佛教学』「仏教研究の諸問題」) 所収、『佛教学』創刊十周年記念特輯)、一九八七年
- 「日本の華厳思想と元暁大師」(韓国国土統一院『元暁研究論叢』) 所収、一九八七年

- 「積華嚴教分記円通鈔の注釈的研究(六)」「華嚴学研究」第二号、一九八八年
- 「法蔵の『梵網經菩薩戒本疏』について」「鎌田茂雄博士還暦記念論集、中国の仏教と文化」(大蔵出版)所収、一九八八年
- 「法蔵以前の『梵網經』諸注釈書について」「駒澤大学仏教学部研究紀要」第四七号、一九八九年
- 「法蔵と澄観の唯心義解釈」「南都仏教」第六一・六二合併号、一九八九年
- 「華嚴同別一乗の成立と展開―法蔵の別教一乗の特異性―」「佛教学」第二七号、一九八九年
- 「法蔵の一乗大乘への批判について」「印度学仏教学研究」第三八卷第一号、一九八九年
- 「法蔵の『大乘起信論義記』の成立と展開」(平川彰編『如来蔵と大乘起信論』所収、春秋社)、一九九〇年
- 「華嚴禪と普照禪」(『普照思想』第四輯)所収、一九九〇年
- 「吉蔵における『大智度論』依用と大智度論師批判」(平井俊榮監修『三論教学の研究』所収、春秋社)、一九九〇年
- 「自灯明一乗論について」「宗教研究」第十六四卷第四輯(通卷二八七号)、一九九一年
- 「自灯明一乗について」「駒澤大学大学院仏教学研究会年報」第二四号、一九九一年
- 「積華嚴教分記円通鈔の注釈的研究(七)」「華嚴学研究」第三号、一九九一年
- 「法蔵の別教一乗の思想的的研究」「顯庵印幻蔡澤沫博士華甲記念、佛教学論叢」一九九一年
- 「自灯明と法灯明について」「宗教研究」第六五卷第四輯(通卷二九一号)、一九九二年
- 「壁の人間観と問答による悟り」(奈良康明監修『仏教討論集、ブツダから道元へ』所収、東京書籍)、一九九二年
- 「The Relation between Chinese Buddhist History and Soteriology」 in Robert E. Buswell Jr. and Robert M. Gimello edited
Paths to Liberation — The Marga and its Transformations in Buddhist Thought (Translated and Edited by Paul
 Groner) (Kuroda Institute Studies of East Asian Buddhism 7 University of Hawaii Press, Honolulu), 1992.
- 「華嚴教学における信」(仏教思想研究会編『仏教思想11、信』所収、平樂寺書店)、一九九二年
- 「太賢の『成唯識論学記』をめぐって」「印度学仏教学研究」第四一卷第一号、一九九二年
- 「二方を証するときは一方はくらし」の一句の解釈について」「宗学研究」第三五号、一九九三年
- 「華嚴教学における国土観」「日本仏教学会年報」第五八号、一九九三年
- 「太賢の『成唯識論学記』「顕宗」段の注釈的研究」「震山韓基斗博士華甲記念、韓国宗教思想再照明」所収、一九九三年
- 「八世紀東アジア仏教学研究への展望」「韓国佛教学SEMINAR」第五号、一九九三年
- 「仏教思想史論」駒澤大学仏教学部論集」第二四号、一九九三年

- 「道元における「宗」について」『宗学研究』第三六号、一九九四年
- 「中国仏教研究の動向―批判的研究―について」『佛教学、仏教思想学会発足十周年記念号』第三六号、一九九四年
- 「南都六宗の宗名について」『宗教学研究』第六八巻第四輯（通巻三〇三号）、一九九五年
- 「道元における「本」について」『宗学研究』第三七号、一九九五年
- 「華嚴経」「明難品」の縁起甚深について」『中村璋八博士古稀記念、東洋学論集（汲古書院）』所収、一九九六年
- 「華嚴教学と『法華経』」『勝呂信静博士古稀記念論文集』（山喜房佛書林）所収、一九九六年
- 「華嚴と禪」『新装版・講座大乘仏教・第三巻華嚴思想』所収（春秋社）、一九九六年
- 「道元の教主論について」『宗学研究』第三八号、一九九六年
- 「宗教類型論について」『宗教学研究』第六九巻第四号（通巻三〇七号）、一九九六年
- 「伝教大師に学ぶ―生涯一学生―」『叡山学院彙報』第二二号、一九九六年
- 「三世学の提唱―ニヒルからバイタルな学問へ―」『法華学報』第七号、一九九六年
- 「伝教大師に学ぶ―生涯一学生―」『叡山学院研究紀要』第一九号、一九九六年
- 「中国華嚴学派の人々による天台教学の依用―特に天台義への澄観の「依憑」に注目して―」天台学会編『天台大師千四百年御遠忌記念、天台大師研究』所収、一九九七年
- 「華嚴系の仏教」『シリーズ・東アジア仏教・第三巻、新仏教の興隆 東アジアの仏教思想Ⅱ』所収（春秋社）、一九九七年
- 「法相宗」という宗名の再検討」『渡邊隆生教授還暦記念論集、仏教思想文化史論叢』（永田文昌堂）所収、一九九七年
- 「全一のイデア―南都における「華嚴宗」成立の思想的意義―」『鎌田茂雄博士古稀記念、華嚴学論集』所収（大蔵出版）、一九九七年
- 「法然と明恵―比較思想史論の立場から―」大谷大学仏教学会『佛教学セミナー』第六七号、一九九八年
- 「仏教思想の四類型について」『宗教学研究』第七二巻第四号（通巻三一九号）、一九九九年
- 「不共生と共生、そして非共生―菩薩型サンガを目指して―」『日本仏教学会年報』第六四号、一九九九年
- 「三種サンガ論」について」『宗教学研究』第七三巻第四輯（通巻三二三号）、二〇〇〇年
- 「大乘止観法門」の再検討」『印度学仏教学研究』第四八巻第二号、二〇〇〇年
- 「宗旨の学」をめぐって、「道元」の思想的な位置づけ、「現代日本仏教の危機と宗学」『宗学と現代』第三号所収、曹洞宗総合研究センター発足記念、曹洞宗総合研究センター・宗学研究部門、二〇〇〇年

- 「実業と仏教」『現代日本の仏教』第二卷「国家と仏教」(平凡社) 所収、二〇〇〇年
- 「大乘止観法門の華嚴思想」『平井俊榮博士古稀記念論集、三論教学と仏教諸思想』(春秋社) 所収、二〇〇〇年
- 「浄影寺慧遠の起信論引用について」『印度学仏教学研究』第四九卷第一号、二〇〇〇年
- 「大乘起信論の再検討」『聖巖博士古稀記念論集、東アジア仏教の諸問題』(山喜房佛書林) 所収、二〇〇一年
- 「宗学概念規定への疑問」『宗学と現代』第四号、曹洞宗総合研究センター・宗学研究部門、二〇〇一年
- 「仏教における相即と不相即」『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第三四号、二〇〇一年
- 「吉蔵の大乘起信論引用について」『印度学仏教学研究』第五〇卷第一号、二〇〇一年
- 「華嚴教学の与えた宋代禅宗への影響」『首楞嚴経信仰形成への要因』(鈴木哲雄編、宋代禅宗の社会的影響) (山喜房佛書林) 所収、二〇〇二年
- 「宋代における華嚴禅の展開」『子瑋の『起信論疏筆削記』を中心にして』(田中良昭博士古稀記念論集、禅学研究の諸相) (大東出版社) 所収、二〇〇三年
- 「真諦三蔵訳出経律論研究誌」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第六一号、二〇〇三年
- 「元暁の起信論疏と別記との関係について」『韓国佛教学BENJINAR、故金知見博士追悼論集』第九号、二〇〇三年
- 「法蔵教学の形成と展開」『論集・東大寺の歴史と教学、ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第一号』(法蔵館) 所収、二〇〇三年
- 「起信論と起信論思想」『浄影寺慧遠の事例を中心にして』(駒澤大学仏教学部研究紀要) 第六三号、二〇〇五年
- 「長水子瑋の『金剛經』理解」『金剛經纂要刊定記』を中心にして」(村中祐生先生古稀記念論文集、大乘仏教思想の研究) (山喜房佛書林) 所収、二〇〇五年
- 「慧遠の大乘義章における起信論思想」『論文の改変の事実をめぐって』(福井文雅博士古稀記念論集、アジア文化の思想と儀礼) (春秋社) 所収、二〇〇五年
- 「華嚴教学の世界観の意義と問題点」『小林圓照博士古稀記念論集、仏教の思想と文化の諸相』(『禅学研究』特別号、花園大学国際禅学研究所) 所収、二〇〇五年
- 「中道と道元禅」『不二中道の問題点をめぐって』(東隆真博士古稀記念論集、禅の真理と実践) (春秋社) 所収、二〇〇五年
- 「コメント」『河野訓「古代日本人の靈魂観」へのコメント、ヘカミととけー宗教文化とその歴史的基盤』(『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第三号』(法蔵館) 所収、二〇〇五年

- 「東大寺大仏造営の意義」(『北海道印度哲学仏教学』第二号所収、北海道印度哲学仏教学会、二〇〇六年)
- 「生死・仏教と向き合い直す(生死)」「現代と仏教」今、仏教が問うもの、問われるもの」(佼成出版社)所収、二〇〇六年
- 「華嚴宗」岡部和雄・田中良昭編、中国仏教研究入門(春秋社)所収、二〇〇六年
- 「中国隋唐時代における大法の形成―教・宗・教宗一体の流れを考察して―」『学習院大学東洋文化研究』第一〇号、二〇〇八年
- 「大乘起信論」実又難陀訳(P本)の成立―いわゆる真諦訳(S本)諸注釈書を考慮する視点から―『多田孝止博士古稀記念論集、仏教と文化』(山喜房佛書林)所収、二〇〇八年
- 「私の仏教学―自洲と法洲の対峙―」『愛知学院大学禅研究所紀要』第三七号、所収、二〇〇九年
- 「慧遠と吉蔵の不二義の比較論考」『地論思想の形成と変容』(金剛大学校外国語叢書二、金剛大学校仏教文化研究所編、国書刊行会発行)二〇一〇年
- 「生死一如」成句流布とその問題点の考察」『日本仏教学会年報―仏教の生死観―』第七五号、二〇一〇年
- 「普照國師における教判と行判の形成」『普照研究』所収、普照研究院発行、二〇一一年
- 「道元・瑩山坐禪觀之較析」、楊儒賓・馬淵昌也・艾皓德編『身體與自然 叢書01、東亞的靜坐傳統』所収、臺大出版中心、二〇一二年
- 「仏教と人権―今、日本の社会への仏教の定着を問う―」『仏教経済研究』第四〇号(駒澤大学仏教経済研究所)二〇一一年
- 「日本仏教の回顧・現状・課題―陝西師範大学での講演を機縁として―」『仏教経済研究』第四一号(駒澤大学仏教経済研究所)二〇一二年
- 「華嚴経問答」における性起と縁起の比較について―中国華嚴教学の視点からの検討―(『華嚴経問答をめぐる諸問題』、韓国金剛大学校仏教文化研究所)二〇一二年
- 「華嚴経」中の空与唯心」呂建福主編『華嚴研究』(陝西師範大学宗教学叢刊之二)二〇一二年
- 「大乘起信論」の如来蔵―『宝性論』と『仏性論』の定義を援用して(『伊藤瑞毅博士古稀記念論文集 法華仏教と関係諸文化の研究』、伊藤瑞毅博士古稀記念論文集刊行会)所収、二〇一三年
- 「華嚴経」における文殊菩薩の意義」(『多田孝文名譽教授古稀記念論集 東洋の慈悲と智慧』、多田孝文名譽教授古稀記念論集刊行会、山喜房佛書林)所収、二〇一三年

共著（論文）

- 柴崎昭和・吉津宜英共著「廓心『圓宗文類集解』卷中について」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五二号、一九九四年
- 柴崎昭和・吉津宜英共著「廓心『圓宗文類集解』卷中の研究―（二）『圓宗文類集解』卷中の教学の特色について―」『印度学
仏教学研究』第四三卷第二号、一九九五年
- 柴崎昭和・吉津宜英共著「義天編纂『圓宗文類』卷第一―解題と翻刻―」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五六号、一九九八
年